

三好十郎

美し人
卷二

三好十郎

美し人
卷二

美しい人 卷二（全三卷） 定価一七〇円

昭和廿八年十二月廿五日第十八刷發行

著 者 三 好 十 郎

發行者 遠 山 直 道

發行所 東京都中央区銀座東六丁目二

株式會社 ダ ヱ イ ッ ド 社

電話銀座五三四〇・二〇一三
同興社印刷・黒岩製本



追いつめられる志乃

……このようにして、戦争は私から、まず弟の浩と、つぎに夫のあなたを、奪いとってゆきました。……浩が戦死したという公報を手にした時には、悲しみというよりも、それは何か痛みに近いような——自分の身体の半分がべりりと引きさかれてしまったような、といえますか。それからくる無意識な憎しみ——誰が憎いともハッキリわからない、しかし火のような憎しみを感じただけです。それでいて、浩の死骸は遂に発見されず、東京上空で戦闘機とともに燃えて散ったに違いないと思っただけで、死に顔を見たわけでも遺骨を手にしたわけでもないの、やっぱり、死んだというのが身にしみません。やっぱり、どこかに生きているような気がします。現に今でも、美奈子さんがヒョコリ訪ねてきたりなると、つづいて浩が、ヤアといつて入ってくるような気がして、一度など、美奈子さんのすぐ後ろに立っている浩の姿をマザマザと見たことがあります。あゝ、もう死んでたっけと思つて、ギョッとしたトタンに、浩の姿は消えましたが——これが昔の人のいった幽霊あうれいだな、なるほどある意味では幽霊というものもあるのだなと思ひました。

……とにかく弟の死は、激しい痛みと憎しみを残して、しかし、何かしら腑はらに落ちないようなものでし

たけど、あなたの亡くなったのは現に私がこの眼で見たのです。そして、ただもう悲しくて悲しくて、私の中から一番大事な柱のようなものをゴッソリ引き抜いてしまった——胸からも腹からもすっかり力が抜けてしまって、不意に自分の身体がフワフワと軽くなってしまったような気がしたのです。あれから一月ばかりというもの、夜になってお母さんも昭も眠ってしまった慶床の中で、私はズツと毎晩泣きましたけど、ヒョイと自分が何か綿のように軽くなって、どこかへ浮いていってしまいそうな気がして、ハッとして寢ている昭の手につかまった事が何度かあります。……そうなの。あなた、聞いてくださってる？ うん、悲しかったの。……でもあたしは、その悲しみにだんだん馴れなければならなかった——昭がいる、お母さんがいる、暮しの事がある。貯金はどうに使いはたし、目ぼしい家財道具から時計や、あなたの本、僅かに残っていた着物など、あなたが警察につかまってる間に売ってしまい、告別式の時の香典かうでんも間もなくなくなる。いつまでも私は泣いてばかりはおれないのです。……やっと、そういう気になった頃、あなたの四十九日がきて、もとの評論の井上編集長のキモ入りで、ああして皆さんで追悼会ついきうかいを開いて下さいました。そして、あの座上での皆さんの間の口論でした。あれはもう、おたがい話合はなあひってわかり合えるといったような喰いちがいではなくて、日本人の間にできてしまった、もう治なおしようのない疵口きずぐちのように見えました。

……あなたは亡くなる前に昭を膝の上に抱きながら、いろんな事を私に話してくださいました。その中でおっしゃった。今後の日本はひどい事になるよ。ひどい混乱が起きて、戦争中よりもひどい事に

るかも知れない——そのあなたの言葉がホントだという事を、あの日に私はマザマザとこの眼で見たのです。あなたのいった事は本当です。あなたは、こんな事をどうして前もって見通すことが出来るのか？……あなたは、その時、また、自分が本能的に感じたことを自分のうちだけで処理しようとしてはいけない。それではホントの強さにはならない。それをホントの強さにして、それでもって本当に闘ってゆくためには、そのような自分を押しひろげて、社会的なものの方へ展ひいてゆかなくてはならないと、おっしゃいました。私はそれをよくおぼえています。私は、あなたが最後におっしゃったこと、それからあの手紙にお書きになっている事を、あなたが私と昭に残した遺言だと思っていますから、いつになっても絶対に忘れはしません。

……それで、私は間もなく、自分で自分の気をひき立てて、世間に出歩いて、いろんな人々に会いにゆきはじめました。三人の生活を立てるためには、何かの仕事を見つけなければなりません。それには、いろんな知り合いにあって、頼んだり捜さがしたりしなければならぬ事もあったのです。そういう時、私は、留守中のお母さんと昭の食べ物の仕度をしておいて、たいがい一人で出かけます。

……私が最初に訪ねていったのは、あなたの大学時代の恩師で、あなたと私の結婚式の時には媒はく酌しやく人としてすわってくださった海老塚えづか先生の所です。戦争中、停年ていねんになって大学をやめられてからお引越したくなった駒込のおうちには、一度あなたと一緒に訪ねた事がありますね。行ってみると、あの辺一帶ズーッと焼けてしまっていて、先生のうちも跡かたもなく、ただ庭の片隅に焼けトタンの壕舎ごうかのよ

うな小屋があるだけ。ガツカリして、それでも心まかせに、私が二三度声をかけますと、その小屋から古背広を着たヨボヨボのお爺さんが顔をのぞけました。「もところに住んでいらした海老塚先生のおうちは、どこへおいでになったか、ご存じないでしょうか？」と私がいうと、お爺さんはモグモグした語調で「うん？ 海老塚？」とポヤーンといて、不思議そうに私に問い返すようにします。その顔をよく見て、私はハッとしました。それが、海老塚先生だったのです。まるで思いもかけない、変りはてた先生だったのです。びっくりして私は、しばらく言葉が出ませんでした……

海老塚先生はうつけたように、無感覚な語調でこんなことをおっしゃるのです。

「ええと、どなたかね？ あん？ 海老塚は、私だが……あんた、どなたですか？ 克子のお友達かね？ フフ、克子なら母親と一緒に埼玉県の方に行つとるから、わしは知らんぞ。……うん？ 栗原？ 栗原東作？ あゝ、評論社にいた、栗原君の、あんたは……ああ、栗原君の細君——奥さんか？ そうですか。そら、どうも、お見せしました。ハハ。栗原君、元気かな？……」

そうそう、亡くなったという——そう、通知はいただいた。警察に永らくつかまっていたそうだね？ いや、うわさは聞いていたが、いやどうも、このテイタラクで、戦災で焼かれたうえに、一人きりで暮しているもんじゃから、お伺いもできません。……そら、大変でしたらう。そうかねえ、ウム。いやどうも、世の中もスッカリ変ってしまった。いろいろと、実にわしなど、どうも本当の事とは思えん事ばかりだ。しかし現にこうして変ってしまったんじやから、これが本当だと思わないわけにはゆかな

いわけ。大学あたりで、わしも随分たくさんの学生に教えてきたが、こうなってみると、何をしてきたのか。もっとも、そういう若い者は、たいがい、戦争で死んでしまったという事もありますからね、……でも死に絶えたわけでもないだろう。それが、誰一人やって来ない。ハハ、師弟の情宜じようぎも、まあ、地を払ったというわけですか。なにしろ、英語からの直訳ちやくやくで日本の憲法が公布される時代じゃからな、へへへ。……あんだ、しかし、よくやって来てくださった。あがってお茶でもいいが、このありさまでな、ハハ……いや、戦争中に出した本の印税が二つ三つ残っていてな、それでまあ何とかやって来たが、その本屋がつぶれてしまった。恩給も、ここんところ払ってくれんで、暮しが立ちゆかなくなってきた……そうなると、なんと、実の娘や家内が、わしの事を邪魔にしないでな、ハハ、いや邪魔といっても、これで私が食べるものを食いさえしなければ邪魔にもすまいが、これで、まだ生きているんじゃないから、多少食う。それが、家内や克子にいわせると、食いすぎるそうだ。六十すぎの老人には配給にしても普通人の半分位だが、それを倍近く食うという。そういつて朝晩にいがみあう。……そして、とうとう、家内と克子は戦争中疎開していた埼玉の親戚の方へ行ってしまつて、わしはこうして一人で。……次男が復員してくるのを待っているが——いや、長男は南方で戦死しました——さて、はたして復員してくるものであるかどうか……ハハ、すべて、もう、いけませんなあ。杜甫とふではないが、まあ、長さん長さん、白木の柄、といったようなわけで、ハハ……」

……海老塚先生の話を、それ以上聞いていることが出来ませんでした。私は何もいい出せずに、早

々にそこを立ち去ってきました。

……そのつぎに私が訪ねていったのは、女学校時代に仲のよかった畠山和歌子さんの所です。私とは、あまりに身分が違っていたので、あなたと結婚してからは畠山さんとはまったく行き来をせませんでした、とてもおとなしい内気な人で、人に会っても、口数のほとんどない、ニコニコと眼つきで人を包みこんでいるといったような人がらでした。女学校時代には、はたから私とその人はエスだといわれる位に仲よくしていました。お父さんは三つも四つもの重工業会社の社長や重役、お母さんは元の華族さんから来た方で、その後お嬢さんを迎えられたのですが、終戦と同時に、そのお父さんもお嬢さんも、たしか追放になったそうですけど、でも、そういう身分の人ですし、私の現在の境遇を話して頼めば、仕事口ぐらいは見つけてもらえはしないかという気持もあって……

大森の和歌子さんの家へ行きますと、もとの通り、豪莊なお邸が焼けないで、チャンとありました、門を入ってびっくりしたのは、総ひのき造りの玄関から外がまえが、ベカベカにクリーム色のペンキ塗りになっているのです。びっくりして、持ち主が変わったかと思つて門の表札を見なおすと、やっぱりローマ字でハタケヤマと出ていて、そのそばに、外国名前の表札。後でわかったのですが、邸宅の洋式の部分だけを、向うの司令部の資源関係の将校に貸してあるらしいのです。案内を乞うと、応接室に通され、和歌子さんが出てくるまでに、三十分以上も待たされました。……

和歌子さんは出てくるなり、いきなり、自分の自然な声域より半オクターヴばかり高い声で、しか

も、外国人と外国語の会話をしなれた人に間々ある、表情たっぷりの、不自然な日本語で話しかけてきました。

「おお、志乃さん、しばらくーよくいらしてくださいましたわねえ！ どうなすって？ お褒りありません。あの、お家の皆さん——あの、なんとおっしゃいましたっけ、ユア・ハズバン？ ク、クリ——あゝ、栗原さん、お元氣ですの？ ご一緒にいらしてくださいださればいいのに、ホホ、いえ、あたくしの方は、ごらんの通り、メチャメチャ。ホホ、オウフル！ ね、ごらんなさい！ 父は追放になって、沓掛^{くかけ}の方の百姓家で百姓になって、ヨボヨボ。春彦は、あなた、まだ三十九なのに、中風になって、それを母がナースしてるの。だから、私がこうして、働いているの。あたしのジョブ、なんだと思います？ おゝ、そんな眠つきなすっちゃ、いやだわ。そうじゃないのよ。まだ、そこまでは落ちないの。ホホ。向うのバイヤアさんたちの相手の、ハイクラスの渉外係り。というか、接待係というか、通訳——でもないのね、話の仲だちをする役目。今日も、実は、これから出かねければなりませんの。志乃さん、せっかく来てくださってわるいけど、向うの人たち、そりゃ、アポイントメントがやかましいの。すみませんわね。車の中でお話ししましょう。どうぞ！」

というなり立って歩き出しながら、ボーイか何かに向って、

「あのね、今夜は向うで遅くなるから、お夕飯はいらさないよ！」

ギイと表扉を開け、ポーチですでにスタートしている自動車に歩みよるなり、

「さあ、どうぞ、どうぞ、志乃さん！」と自分が先きにのりこみ、私をのせて、ボタンとドアをしめるなり、運転手に「丸ノ内！」それから、私に向って、せかせかとしゃべりはじめました。

「あたし変ったでしょ？　びっくりなすった？　ホホホー　第一、こんなキノノ着てね、フフ、背中なんか、すけて見えるでしょ？　このヒトエ、向うの一番新しいナイロンの生地ですって。イヴニングでも作ればいいんだけど、バイヤアたちは、私たちがキノノを着ているのを好くのよ。フフ、いくら志乃さんがびっくりなすったって、仕方がないのよ。父は没落、母はモーロク、御亭主はヨイヨイで、誰が一家を食べさせてくれるの？　……ハハ、そんな悲しそうな顔なさっちゃ、いやだ。それはうそよ。それは嘘！　いえ、はじめは、そりゃ、多少そういうつもりもあったけど、はじめて見たら、結局、こんな事がおもしろくなったというのが本当のところ。人は、そりゃ、何とでもいって、笑いたければ、笑うがいいわ。没落財閥の若奥様で、うらめしそうにしているよりか、とにかく、向うの男たちを好きなように引きまわして、お金もうけをするのが、おもしろいの。生甲斐がある。それだけは、たしかだわ。どう、志乃さん、あなたも学校時代は英会話得意だったわね、あたしがご紹介するから、ひとつはじめませんか？　なあに、なんでもありゃしないの。向うの連中と来たら、良い身なりをして、紳士づらしても、実はガスな、成りあがり根性の、動物的でケチクさい、ホントの意味の教養なんて、ここから先きも持てない奴が大部分よ。イットもザットもあるもんですか。すてし色っぽいところをのぞかして、英語なんか、ブロークンでいいのよ。心臓だけ、やらない、志乃さ

ん？ あなたのようなきれいな顔で、こんな立派な身体してて、もったいないわ。どう、ホントに、私と組んで、やりませんか？」

……聞いているうちに、私は、次第にいたたまれなくなつて、ほとんど自分の事は話さず、ソココに自動車からおろしてもらつて、帰つて来ました。私には和歌子さんの生き方や考え方について批評したりする力はありません。ただ、戦争というものの、戦争がすんでこうしている今の時代というのが、どんなに激しく人を変えてしまふのだろうと、しんから怖ろしい気がするだけです。

……変つたのは和歌子さんみたいな人ばかりではありません。進歩的な考えを持った人たちも、その人たちなりに変りました。あなたも二三度あったことのある佐川京子さん。ズーッと本所の隣保館で保母ほぼなどをして貧民窟ひんみくの社会事業をなすつてた人です。終戦後、それまで区役所につとめていたご主人と別れて、自分より年下の朝鮮の人と結婚なすつたという噂さは聞いていましたが、私が、その本所のお家を捜しさが捜して尋ねていつてみたら、もとはあんなにジミで、まるでお婆さんじみてみえる落ち着いた人が、まっ赤に口べにを塗り、頭髮などもかりあげにしていまい、男のズボンをはいて、何かしら、カーッとのはせたような調子で、人の話も半分も聞かないで、自分だけでまくしたてるような具合。第一、裏町のバラック建ての小さい京子さんの家をやっとながし当てて、ごめんくださいといったトタンに、家のなかから大勢の歌声が響きはじめたのには、びっくりしました。

「……あとでわかったのですが、その地区の左翼の団体で何かのカンパがあるので、その相談に集合

があつたのです。京子さんは私を見て、涙を流さんばかりに喜んで、いきなり立ちあがると、そこに集っている人たちに向つて――

「皆さん！　ちょうどよい時に見えましたから、古い私の友人の栗原志乃さんを紹介いたします。栗原さんは皆さんの中には、新聞で読んでおぼえている方もあると思いますけど、戦争中に敵国のためにスパイ活動をしたという嫌疑で検挙された大学教授や雑誌新聞の記者などの十六七人の人たちの一人であつた栗原東作氏の奥さんで、栗原氏は警察で残酷な拷問を受けたため負傷した上に、結核を悪化させ、終戦直後、横浜の病院で亡くなりました。……（集まつた人々の中に、「ああ……」「おお！」などの声がしました。）　いうまでもなく、スパイ活動をしていたなどというのは、日本軍はつ政府の兇悪なフレーム・アップであつて、實際は、進歩的な雑誌記者であつた栗原さんは、どうすれば、平和が一日も早く訪れてくるようになるかと、良心的な日本人としての当然の努力をなさつていたのにすぎないのです。それを軍閥政府はうち殺してしまいました。あとには、この志乃さんと小さいお子さんと、お母さんが残されました」と、ちょっと言葉をきつて、ほとんど泣いている口調で、

「……このうらみは忘れることはできません。それは志乃さんのうらみであるとともに、私も階級全体のうらみであると思うの！　そうじゃなくて？」

「そうだっ！」と男の聲が叫びました。

「……私どもは、今日さうよど、その志乃ちゃんが来てくださった今、日本帝国主義のギセイ者栗原東

作氏の靈をとむらうと同時に、栗原氏の尊とい死を、今後の日本の幸福のために最も正しく役に立てるように誓いたいと思います！ 志乃さん、どうぞ！ いいのよ、こっちへ、どうぞ！ さあ、志乃さん！

集っている人がバーッと拍手しました。やがて、先ほどの革命歌を二三の人が歌いはじめ、全員がそれに和して力強く歌いはじめました。

……私は、穴にでもはいってしまいたいような気がした。京子さんの調子は、高すぎるというか、偉らすぎるというか、とても私にはついてゆけない。そこにいる人たちは、すべてを、世の中全体のために考えたりしているのに、私といえば、自分一家三人が今後どうして食べてゆくかということだけにかまけてしまって、そのための職探しにきている。ミジメだし、はすかしいような気がして、とてもいたまれない。私は何もいわず、皆さんの革命歌から追いついて立てられるように、すぐにそこをおいとまして外に出ました。

……それからも、私は、知っている人の誰彼を訪ね歩きました。井上先生の所へも、熊丸さんの所へもゆきました。熊丸さんは事務員の口でよければ見つけてあげるといってくださいましたが、そういつている熊丸さん自身が、証券のサギ事件に関係して、間もなく検挙されてしまいました。そのほか、あなたの元の知り合いの人たちにも会いに行ってみました。たいがいは、住所が変わっていて見当らず、見当たった人たちは境遇も気持ちもスッカリ変わってしまって、相談を持ち出してみても無駄。相談に

乗ってくれそんな人には、その力がない。

……美奈子さんのうちへも時々寄ってみますが、伯父さんは中風で口もきけなくなつて、寝たつきりで、どういふのですか、食べるものだけは人の二倍ぐらい食べるそうで、それに山梨の疎開から連れもどした秀男ちゃんもミちゃんを入れて四人の暮しをまかなうために、美奈子さんはあれこれの仕事を見つけては毎日出歩いているため、メッタにあえない。美奈子さんの苦しさは、私よりもひどいかもしれない。それに私、しばらく前に、ヒョイト気がついたのは、私があまり度々美奈子さんに会いにゆくのはいけないのではないか？ 美奈子さんは死んだ弟のいわば許婚で、ほんとでもう浩のお嫁さんと同じように私どもも思い、美奈子さん自身もその氣でいた。それは私にもわかる。私はそれがうれしい。しかし、浩は死んだ。死んだことが、シツクリとは腑におちないけれど、死んだのは事実です。そして美奈子さんは、まだ若くて、美しい。これから良い相手を見つけて結婚しなければならぬ人。だのに、その浩の姉の私が、いつまでも美奈子さんの近くに在ると、邪魔になる。美奈子さんの将来をふさぐ事になる。……そう思った。それから、私は美奈子さんの家には、あまり寄らぬようにした。ひとつは、自分のうちの暮しの方針もたたないのに、美奈子さんの家の苦しさを見るのがつらいためもある。……とにかく私はすぎ腹をかかえて、方々を駆けづり歩きました。しかし、仕事は見つからない。そうしている間も、ますます暮しはひどくなり、配給物を受けとる金にもつまってくるようになってきました。一度は横浜の横田組のおだいさんの所にまでいきました。ちやうどおだいさんは

仕事の用で主人のかわりに神戸へ旅行なすっているとかで、子分の人が

「親方あ現場にいますよ。辰造あ、いも、そっちで。御案内しましょう」といって、ドンドンつれていってくれたのは、横浜のはずれの、何かのビルディングを建てている建築場。コンクリートを混ぜて流し込む音と、リベットを打つ音が耳をつんばになるようにしていて、その小さいバラック小屋の事務所で、デブブリとした横田さんにはじめてお目にかかりました。

横田さんはコンクリート・ミキサとリベッティングの音で、大音声を出しても切れ切れにしか聞こえないようななかで、「やあ！ 栗原の奥さんですか。いやいや、お礼なんて、そんな——おだいから、お話あ聞いています。ハハ！ あいにく、おだいは神戸にいつてましてね。ハハ！ いやなんかまた、お困りの事があったら、わしん所ですむ事なら遠慮なくいつてください！ いやどうも、こんなような荒っぽい仕事ばかりで、ハハ！ わしは今日はちょっとこれから、ほかにゆかなきゃならんが、どうか、ごゆっくりなすって。そこらに辰造がいるはずだから、——おおい、辰う！ 辰造はいねえかあ？ いやたしかに、向うの方だ……」

辰造さんは、その半出来のビルディングの地下室みたいになった、まわりを荒ごしらえしたコンクリートで囲まれた薄暗い所に、一人で立ちはだかっていました。妙な音がすると思ったら、私、びっくりしました、辰造さんは右手にピストルを握って、正面のコンクリート壁の方を向いて、それをつぎつぎと発射しているのです。

ドギモを抜かれてしまつて、立って見ていますと、やがて私に気がついて、こっちを向いたのは、やっぱり、あのニコニコした辰造さん。

「やあ、栗原の奥さん！　いつ、来ましたあ？　坊やは元気ですかい？　一緒じゃないかねえ、今日は？　どうしたんです？　どうか、したかね？　……ああ、このパチンコですかあ？　アハハ、なあに、こいつは自動ビストルといつてね。へへ、親方あ、向うの奴から手に入れたちつてね、イザという時にゃ役に立つかも知れねえから、ためえ稽古^{けいこ}しとけというんです。へへ、ここでぶっぱなせば、こんな音がしてるからね、ほかから聞こえねえから、こうして、稽古してるんです！　なあに、こんなもん、オモチャと同じだ。ね、こう握つて、この引き鉤をひくと、そら！（ダダダ）普通の奴あ、弾あ一つずつ出るきりだが、こいつは、つづいてドンドン飛び出すんだ！　奥さん、やってごらんさない！　こう握つて、いえ、こんな風に——」

……あつけに取られてゐるうちに、私は辰造さんから自動ビストルの打ち方を習つて、……そして、それきりで、私は横浜からもどつてきた。おだいさんも横田さんも辰造さんも親切にしてくれますけれど、あんな荒くれた世界には、私のいられる場所はありません。妙な具合にがっかりして、私はトボトボ家へ帰つてきたが、駅を出てマーケットのわきを通ると、例のイカのつけ焼きの匂いと、テンブラの油の匂いがムーッと来て、クラクラッと目まいがして倒れそうになった。その日の朝、お母さんと昭のお屋のフカシパンを作つて、それを全部家において、自分はなんにも持たずに出かけ、出さ